

.....

東京大学乳幼児保育実践政策学セミナー

園におけるリーダーシップ

～ 東アジアの動向 ～

.....

主催：東京大学幼児教育研究会
共催：東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター
(公財) 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

2016年1月10日(日) 9:45開会 16:40閉会
福武ラーニングシアター（東京大学本郷キャンパス）

平成 28 年 1 月 10 日、東京大学本郷キャンパスの福武ラーニングシアターで、東京大学幼児教育研究会が主催して「園におけるリーダーシップ：東アジアの動向」と題した乳幼児保育実践政策学セミナーが開催された。午前の司会は上田敏丈名古屋市立大学大学院准教授、淀川裕美発達保育実践政策学センター特任助教、午後の司会は中坪史典広島大学大学院准教授、高橋翠発達保育実践政策学センター特任助教が担当。開会のあいさつには秋田喜代美発達保育実践政策学センター長、田中雅道（公財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構理事長が立った。



講演 1

◎「幼稚園園長の専門性基準」および園長研修の実施◎

幼稚園園長を対象とした研修センターを
設立し、多彩な各種研修を実施

まず中国から王小英東北師範大学幼児教育学院教授にご登壇いただいた。同大学では中国全土の幼稚園園長を対象とした研修センターを設立、「幼稚園園長の専門性基準」を作成したほか、園長の能力・スキルに応じた、多層構造からなるさまざまな研修を実施している。



通訳：呂小耘氏
東京大学大学院博士課程院生
中国 東北師範大学
幼児教育学院教授
王小英氏
Xiaoying Wang

本日は「『幼稚園園長の専門性基準』および園長研修の実施」というタイトルで発表を行います。中国には教育管理職研修を実施している国家研修機構（大学附属研究センターを含む）が 4 か所あります。それぞれ、北京国家教育行政学院（大学学長対象）、華東師範大学（中学校校長対象）、北京師範大学（小学校校長対象）、東北師範大学（幼稚園園長対象）です。東北師範大学教育部幼稚園園長研修センターは四番目の施設として 2011 年に設立され、これにより中国では全教育区分について公的機関で学校長研修を実施できるようになりました。なお、各省にも園長研修センターがあります。

センターでは「幼稚園園長の専門性基準」を作成すべく、まず大掛かりな園長インタビューを実施しました。次に、質の高い幼児教育を実施している園長へのインタビュー結果に基づき、園長・教員・保護者を対象とした全国規模の質問紙調査を実施しました。その上で、エビデンスに基づく「幼稚園園長の専門性基準」を作成しました（2015 年 1 月公表）。「幼稚園園長の専門性基準」では、以下の 3 領域・6 項目のモジュール構造から成る専門的な職務責任を設定しています。

- ① 価値のリード
〈1〉幼稚園の計画、〈2〉発展と幼児の文化の運営の先導
 - ② 教育のリード
〈1〉保育・教育、〈2〉教師の成長の先導
 - ③ 組織のリード
〈1〉内部管理の最適化、〈2〉外部環境の調整組織の先導
- です。6 項目には、それぞれ 3 つの専門性の次元（幼児教育に関する理解と認識、知識と方法、能力と行為）が含まれています。本基準に準拠して各省／市／区の教育行政部門が設置されたり、幼稚園園長の管理・研修が実施されたりしています。

カリキュラムの中核は
就学前教育理論

センターで実施している研修は多層構造になっており、最上層から、有名な園長を対象としたパイロットクラス、優秀な園長の研修クラス、中核園長の高度研修、在職向上研修、勤務資格研修と続きます。現在は主として中核園長の高度研修と優秀な園長の研究クラス（海外研修を含む）を実施しています。

カリキュラム案は、通常、センターと教育部（日本の文部科学省に相当する部局）で設計されます。まず、研修前にセンター研究部門が調査研究を実施して報告書を作成します。次に、カリキュラム案が設計され、主席専門家である私が審査と修正を行い、最後に中心メンバーが審査および実施を担当します。

カリキュラムの中核を成すのは就学前教育理論であり、その外側の要素として、管理理論と実務、教養課程を位置付けています。研修は様々な形式で行います。具体的には、専門家による講演、公開研修、テーマサロン、園長のワークショップ、実践基地（研究指定園）での園長の観察研修、管理職経験の共有、チューター制（修士号取得者がグループ指導を行う）があります。現在は研究指定園の拡大にも力を入れており、定期的に開催されている実践教育会議で研究指定園の建設を強調しています。

※「幼稚園園長の専門性基準」「高度研究クラス研修ハンドブックの一部抜粋」「第 1 期全国幼稚園優秀園長クラスチューター指導要領」の日本語訳を Cedep ウェブサイトに掲載しております。ぜひご覧ください。

開会
挨拶

欧米とは乳幼児教育の哲学や体系が異なる
東アジアの先進事例に学ぶ

（公財）全日私立幼稚園幼児教育研究機構との共催シンポジウムでは、昨年に続き「園の教育におけるリーダーシップ」の問題を取り上げます。その中でも今回は「東アジアの園におけるリーダーシップ」を取り上げました。園長先生をはじめとする園のリーダーシップは、OECD の乳幼児教育ネットワークでも多くの先進諸国が重視するホット・トピックになっています。

保育の質を園単位で考える時には、園におけるリーダーシップと共に、それを支える地方の行政を含む園のサポートネットワークのあり方にも目を向ける必要があります。私が

以前、各国を訪問した際には、中国では園長の専門性基準がすでに策定され、国の幼児教育センターで素晴らしい体系だった園長研修カリキュラムが実施されていました。また、シンガポールでは、ICT 機器を駆使したリーダー養成の研修の仕組みを作ろうとしておられました。そして、台湾では園を中心にして専門家による学びの共同体を、どのようにつくっていくかという議論が行われていました。特に東アジアは、欧米とは乳幼児教育の哲学や制度体系が違いますので、本日はその辺りも含めて議論できればと思っています。



東京大学大学院教育学研究科
発達保育実践政策学センター長
秋田喜代美
Kyomi Akiya

開会
挨拶

幼児期は社会の中で仕事をし、
生きていく時の基礎を培う時期

日本の幼稚園教育要領の改訂に向けた作業が始まりました。これは学校教育法第 1 条の中での幼稚園の位置づけが変わってから、実質的には初めての教育要領の改訂作業になります。最大のテーマは、やはり小学校との接続であり、幼児期の遊びを中心とした主体的な学びの延長に小学校以降の学校教育をどのように位置付けるのかということが非常に重要な課題であると考えています。

幼児期が生涯の基盤を培う時期だということ

との本当の意味は、単なる小学校の下地作りではなく、社会の中で仕事をし、生きていく時の基礎となるということにあります。そこで、小学校との学びをつないでいくのには幼児期に何を育てるのかということについて、きちんとした議論が必要ではないでしょうか。今回、中国、台湾、シンガポールからお越しいただいている先生方にサジェスションをいただけたらと思います。



（公財）全日本私立幼稚園
幼児教育研究機構理事長
田中雅道氏
Gado Tanaka

講演 2

◎カリキュラム改革の中でのリーダーシップ◎

園のカリキュラムリーダーをスーパーバイザーがサポート、保護者とともに問題解決、保育者の能力開発を図る

続いて台湾の幸曼玲臺北市立大學幼児教育系副教授が登壇された。台湾では園の観察指導を行うスーパーバイザーを各地域に配置。園の軸となって保育課程の編成と指導に携わるカリキュラムリーダー、保護者とともに問題解決や保育者の能力開発のサポートにあたる。

台湾には6,468園の幼児園があり、2種類の保育者（幼稚園教諭と保育士）がいます。台湾では2012年に幼保一体化が実施されました。新しい教育要領も交付され、園長資格取得に向けた研修制度もできました。対象は在任3年以上の保育者です。研修は7課程（就学前教育の理論、園の業務、保育の専門性と実践、人事管理、文書と財物管理事務、健康安全管理・機器処理、園と保護者の相互コラボレーション）、計180時間から成ります。

新しいカリキュラムの指導計画の策定・推進の責任者を私が務めています。各地域に定期的に園に入り観察指導を行うスーパーバイザー（計200名程度、大半は幼児教育専門の大学教員）を配置しています。受け入れ園ではカリキュラムリーダー（主に園主任である幼児教諭）を1名立て、保護者を含めた三者で問題解決を図ります。

カリキュラムリーダーは保育課程の編成と指導を担当

カリキュラムリーダーは保育課程の編成と指導に携わります。具体的には、どのような子どもを、どのように育成するかを意識しながら、目標立案、設計、実施、修正を行います。保育者の能力開発が重要な役割となります。保育者の動機づけや参加度、能力、自信や同僚たちの信頼感や相互扶助に注目しながら、学習コミュニティを生成して保育者が相互に信頼し合う雰囲気を引き出し、自主的な振り返りを促す役割を担います。

カリキュラムに関する知識の獲得や教育要領・理念の理解を促すことも必要です。カリキュラム編成にあたっては、過去の物を資源として生かしながら、園の特色や地域の特徴を生かした教材や活動を見つけていきます。自己編成の過程を経ることで、教師の専門性、カリキュラム、幼児教育の質が高まります。

研究者（私）と近隣園長がスーパーバイザーとなりカリキュラムリーダーを担当した新任の私立園長の指導を行った事例

と、別の公立園で園主任がカリキュラムリーダーとなった事例をご紹介します。保育者個人への配慮や肯定、相互作用の促進、保育者の経験や個性に合わせた課題の工夫を通じて徐々に保育者たちに自主性が芽生え、園が継続的に成長している事例と、新人の公立園主任が周囲に気を配り過ぎたあまり変化をもたらそうとしない事例です。

課程改革において一番重要なのは人

安定、肯定、ゆらぎ、前進という4段階サイクルの反復はカリキュラムの変革過程にもかかわる要素です。すべての決定は一時的だということです。まず決定し、進みながら何か変えようとする。この過程では問題・目的意識を持つ、批評・批判せず過去の出来事を受容する、共同で考える、スーパーバイザーが伴走することが大事です。このサポートシステムとして縦（上位組織との連携）・横（コミュニティ資源の活用や研究者の参加）の2軸を意識したネットワークを作っています。

課程改革において一番重要なのは人です。雁がV字型を成して飛ぶと上昇気流が生じ単独の時よりも効率が增加するという話があります。ただ、チームリーダーが疲れた時、先頭を担う新たなリーダーが必要です。まずは十分な人数をそろえた上で、全員が自発的、自主的、そして積極的に競い合う環境を作ることが重要です。

※『カリキュラムリーダー：ハンドブック』『カリキュラム指導スーパーバイザー指導マニュアル』（部分抜粋）の日本語訳をCedepウェブサイトに掲載しております。ぜひご覧ください。



通訳：王林鋒氏
元・東京大学大学院博士課程院生
台湾 臺北市立大學 幼児教育系副教授
幸曼玲氏
Marn-Ling Shing

講演 3

◎シンガポールでのリーダーシップをめぐる問題の探究：国際的な文献レビューを通じて◎

「階級型モデル」から「分散化された協働型モデル」へリーダーシップの捉え方が変化

シンガポールのシレーネ・リム SIM 大学専任講師は、乳幼児教育のリーダーシップの文献レビューをふまえて、リーダーシップ概念の展開について講演された。また、シンガポールの園長研修や保育認定制度（SPARK）などが紹介された。

本日は、まずリーダーシップについて主に英語文献のレビューをふまえてお話をした後に、シンガポールのリーダーシップの現状についてお話しさせていただきます。

リーダーシップというと、伝統的には1人のカリスマ的リーダーがいて、その人についていけばいいというイメージでしたが、今はリーダーシップにおける役割が分散して、色々な人がその役割を担うことでリーダーシップを包括的に考えていく方向に動いています。前者が「階級型モデル」、リーダーが色々なものを下に降ろしていくという型です。後者が「分散化された協働型モデル」、それぞれの人が同じだけの比重を持って活動に従事し、協力しながら何かをつくりあげていくという型です。

乳幼児教育におけるリーダーシップ概念の展開を見てみると、まずビジネスの世界から予算や人といったリソースの管理、運営という視点が入ってきました。さらに、養護だけではなく教育的な視点も取り入れて、子どもの幸せを支えていくアドボカシー的な考え方が加わり、社会構成主義的視点からリーダーシップを捉える視点も加わってきました。最近では、先ほども申し上げたように「階級型モデル」から「分散化された協働型モデル」へとリーダーシップの捉え方に変わってきています。また、「コンピテント・リーダーシップモデル」も提唱され、それを支える同僚性や専門家としての成長、スーパーバイザーの支援といった組織の風土が、乳幼児期の質に影響を与えるという知見も出されています。

イングランドのEPPE調査から派生したリーダーシップに関する研究では「システムシンキング」という用語が出てきます。個別の要素のみを見るのではなく、すべての要素を包括的に捉えることで、一つが持っている力よりももっと大きな力としてものごとは動き始めるし、作用し始めるという説明です。このリーダーシップの考え方を、日々の生活の中で見えてくる課題というミクロなレベルと、職場環境というメゾもしくはマクロなレベルというふうにと考えると、ブロンフェン布伦ナーの入れ子構造に当てはめることができます。

園長の要件としてデザイン、マネジメント、実習と研究が課せられた

最後にシンガポールにおけるリーダーシップの現状についてお話をさせていただきます。今までは園長になるための要件として、最低2年間保育経験があれば誰でもなることができました。さらに850時間、働かながら受講すれば免状が与えられました。しかし、今年の4月からは、リーダーシップの上級免許ということで、1年半で3つの領域を修了することが課せられます。3つの領域とは、カリキュラムのデザイン、マネジメント、実習と研究です。また、シンガポールでは、SPARK（スパーク）という保育認定制度があります。構造とプロセスに関する7つの領域があって、それぞれに細分化された項目があります。その項目をチェックすることで、アウトカム、すなわち成果につながっているかをサイクルで見えていくシステムです。

今、シンガポール政府はこの考え方を保育の現場に導入することで、保育の実践を通して子どもたちに一体どのような影響が出ているのかを明らかにしたいと考えています。コンピテンシーモデルの発展というところが、シンガポールのこれからの挑戦だろうと思っています。シンガポールは今年、独立50周年を祝ったばかりの新しい国です。とにかくどんどん新しいことを起こしていこうと頑張っている国だと見ていただければと思います。ありがとうございました。



通訳：門田理世氏
西南学院大学教授
シンガポール SIM 大学 専任講師
シレーネ・リム氏
Siene Lim

パネル
討論

●園長のリーダーシップと専門性：東アジアの動向から学ぶ●

個人主義中心の欧米とは異なる、
東アジアならではの連帯型リーダーシップを目指す

講演に続き、鈴木正敏兵庫教育大学准教授がコーディネーターを務め、3人の講演者と淵上孝文部科学省初等中等教育局幼児教育課長、安達譲（公財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構研究研修委員長による実りの多いパネル討論が行われた。ここでは討論の一部を紹介する。

コーディネーター
鈴木正敏 兵庫教育大学准教授
パネリスト
王 小英 東北師範大学幼児教育学院教授
幸 曼玲 臺北市立大學幼兒教育系副教授
シレーネ・リム SIM 大学 専任講師
淵上 孝 文部科学省初等中等教育局幼児教育課長
安達 譲 （公財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構研究研修委員長

パネル
討論 1

行政と研究者で優れた実践を再整理し、
よい部分を現場の先生方と共有、研究と実践の架け橋を

今年（2016 年）は、わが国で初めての幼稚園ができて、ちょうど 140 年目です。そして昨年、「子ども・子育て支援新制度」という新しい制度が導入されまして、色々な意味で新しいスタートのタイミングだと考えております。

今の子どもたちが成人して社会で活躍するころには、社会や職業のあり方が大きく変化しているでしょう。厳しい挑戦の時代を乗り越え、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力が必要となります。その中で教育のあり方も一層進化させていく必要があります。

現在、以下の論点が重視されています。子どもたちに育てほしい“資質・能力”、すなわち個別の知識・技能に関する分野、思考力・判断力・表現力に関わる分野、そして学びに向かう力や人間性の3つの柱です。次が“アクティブ・ラーニング”。「習得」「活用」「探究」という学習プロセスの中での、問題発見や解決を念頭においた深い学びの過程の実現。他者との協働や外界との相互作用を通じ、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程の実現。子どもたちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程の実現です。そして“カリキュラム・マネジメント”。内容面の組織的なマネジメント、活動面のマネジメント、そしてリソースのマネジメントです。これらを園長一人だけでなく、すべての教職員が園長のリーダーシップの下で理解し進めていくことが必要です。子どもの学びや育ちを保障するた

めに、教育目標や教育内容ももちろんですが、やはり先生方の力というものを各園でいかに引き出すか、そのリーダーシップが極めて大事だろうと思います。

幼児教育における研究と実践の架け橋については、現場にはたくさんある優れた実践を、行政と研究者とでうまく再整理し、よい部分を抽出し、現場の先生方と共有していく。こういったことが大事でかつ有効だと本日先生方のご講演を聞いて強く認識しました。その意味で、東京大学の発達保育実践政策学センターには、非常に大きな役割を担っていただけたと思います。また、今年4月に国立教育政策研究所に幼児教育研究センター（仮称）が新設されます。同時期に、各都道府県の幼児教育センター設置、市町村の幼児教育アドバイザー配置の予算も整備されます。重層的な実践と研究との架け橋が、各地域、各現場の教育を支え、質を高めていくように、文部科学省でも教育の中身、あるいはその実践を、これから子どもたちの進んでいく先を見据えて考えております。これからも先生方のご指導をいただきながら、さらに深めていきたいと思っています。



文部科学省初等中等教育局
幼児教育課長
淵上 孝氏
Takashi Fuchigami

パネル
討論 2

保護者、地域、社会、行政と連携、
外部の知恵入れ、園のシステムを改善・改良

リーダーシップで大事なことは、保育者の自律性や協働性を確保しながら力量を高めていくことだと考えています。当研究機構の各地区代表委員の方々と園長のリーダーとして必要な質とは何かという話し合いをした際、次の3つが出てきました。「教育・保育をつくる」、「マネジメント」、そして「保護者、地域、社会、行政との連携」です。「教育・保育をつくる」とは、カリキュラム・マネジメントを含め、教育の方向性をつくっていくこと。園内研修の実施も含まれます。次が「マネジメント」。これは運営や経営、安全管理なども入ります。そして「保護者、地域、社会、行政との連携」。保育者同士の園内での人間関係も非常に重要だろうと思います。

文科省の委託で、園をよくしていくシステムに関する調査を8年ほどしています。そこでは公開保育、すなわち園の保育について外部のコーディネーターと一緒に良さや課題を考えたりすることに効果がありました。さらに、地道にその園をよくしていくためには、やはりリーダーの役割が大事だろうと、今年度初めてリーダー研修が実現しました。リーダーシップを考える際、園長あるいはリーダーと保育者との関係と、保育者と子どもとの関係は似てくると言われます。園長がとても指示的で上から物言うようなところでは、先生が子どもに「これを作らせる」という保育

になりがちです。こう考えますと、私たちリーダーと保育者との関係が、やはり重要なのではないかと思います。

保育者自身の保育に対する心持ちというのは段階が上がっていくと思います。怒られる恐怖からプロとしての義務感へ。それも大事ではありますが、やはり喜びになって、「今、私たちが行っている保育で、この子どもたちが一生幸せに、自分らしさを発揮して過ごせるんだ」と信じて保育することが大事です。われわれ園長も、「本当にこの仕事は面白いよ、いい仕事やね」とか、「楽しいよな」というふうに先生自身に感じてもらうことがリーダーの役割の一つとして大きいと感じています。ただ単に子どものお世話でケガさせずに安全に帰すというだけでなく、「一生に関わる大切な時期に保育している、とても幸せな仕事だ」と先生方に感じてもらいたいと強く思っています。



（公財）全日本私立幼稚園幼児教育
研究機構研究研修委員長
認定こども園せんりひじり幼稚園・
ひじりにじり保育園 園長
安達 譲氏
Yuzuru Adachi

討論

国としての取り組みについて

王氏 今、中国では就学前教育への財政支援に力を入れています。幼稚園園長研修への投資もその一環です。日本でも幼児教育センターが設立されるということで、これから日本の幼児教育の研究、実践にも大きな発展があることを期待しています。

淵上氏 わが国でも国全体として大きなムーブメントになってきています。幼児期の教育はその後の子どもたちの学びや育ちのもっとも根幹となることです。幼児期の教育は幼稚園、保育所、認定こども園も含めて全体としてその質を支えてくということも課題となっていきます。諸外国の最先端の知見も借りながら、わが国も先に進んでいければと思っています。

東アジアならではのリーダーシップについて

幸氏 4か国には共通点があると感じました。私たち東ア

ジアの人たちはチーム、団体という意識が強く、皆の協力を得ながら自分のことを解決していくという伝統があることを強く感じました。個人主義中心の欧米とは異なる、東アジアならではのリーダーシップについて考えました。

安達氏 個と集団は相反するのではなく、個としての意見を受け止めてくれる集団の安心感があって初めて、個人の意見が出せるのかなと思います。東アジアのチームとしての良さを個に、そして個がチームにというようになったらいいなと思いました。

リム氏 シンガポールはアジアですが、西洋の方を向いて国が進んでいます。他のアジア諸国とはまた違った、非常に厳しい葛藤を抱えています。リーダーとしてどれだけ西洋の個人主義的な良さを捉えつつ、一方でアジア的な良さを保つかというバランス・ゲームに入り込んでいます。本日は学びの共同体という各国の共通点と、そのために本当になくなくてはならない人がそこにいないと進まないということも改めて感じました。

まとめ

●これからに向けて●

他国の取り組みに学びながら 日本独自のカリキュラムをつくる

今、日本の中で幼児教育の制度が大きく動いています。その一番中心となる部分は幼稚園、保育所、認定こども園等、また公立・私立を含めて統合的な枠組に位置付けていくことだと思います。本日の三か国のお話は、日本より5年ぐらい早く取り組んでいる。それは日本にとって残念であるとともに幸いなことです。その5年の知恵に学ぶことができるわけですから、ここで学びながら幼児教育を充実させることが必要と思います。

まず、二つの論点を整理します。一つはリーダー層、園長レベルの専門性の向上の問題です。日本の幼稚園、保育所の園長は教育への見識という程度の基準ですので、実質的には誰でもなれます。保育者としての経験も特別な研修もありません。園長になる際の研修義務が必要と思います。まず、リーダー層や園長層がどういうことを自分の考え、理念やスキル、知識として持っていなければならないかの整理が必要でしょう。他国の取り組みから学びながら日本のカリキュラムをつくる必要があります。そういう意味で今日は大いに学んだし、勇気をもらえた、目標ができたと思います。

もう一つは、特に台湾でなさっているスーパーバイザー。日本でも幼児教育アドバイザーが来年度から本格実施に入り、いずれ全都道府県に置きたいということです。いわゆる幼児教育センターで幼児教育アドバイザーの研修をし、各幼児教育アドバイザーが市町村で、その下のレベルの人の研修、あるいは各園

のリーダー研修をする。そういう仕組みで、公立も私立も、幼稚園も保育所も認定こども園も全部で行うということが大事です。各園の理念をどう尊重するかも重要な点になります。

さらに、互いの保育を見る、うちはこうやっているよという情報交換の場をつくる。ある一定のフォーマットでの記録、ドキュメンテーションを持ち寄り話す場をつくるのが非常に効果的で、教育的にも意味があるように思います。

今後は二つのことが大事だと思います。一つは幼児教育アドバイザーに誰がなるか。退職園長や養成校の先生、そういう人たちへの研修をちゃんとしなければなりません。それぞれの価値観や理念をとうとうとしゃべることになっては、反発を受けるだけです。もう一つは基本的に地域ベースだということです。各自治体にある園全部をカバーしネットワークをつくりながら、すべての園をより良く変えていく。限られた園だけにしない。これが大事な原則だと考えています。



白梅学園大学教授
無藤 隆氏
Takashi Muto

閉会挨拶

画期的なシンポジウムを 開催できたことに心から感謝

今日一日、非常に多様な知識をお互いに共有できたなというふうに思います。

まず、本日ご登壇いただいた皆様に御礼申し上げます。文部科学省の幼児教育課長がこのようなシンポジウムに来られるということは、これまでほとんどないことでした。それが最後までご参加くださり、熱心に聞いてくださいました。画期的なことと思います。

また何よりも、タイトな日程の中お越しくださった王先生、幸先生、リム先生に、感謝申し上げます。もう一度、三人の先生方に多大な拍手を送りたいと思います。そして、(公財)

全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が常に、前に出ないで自由にさせてくださって、「誰を呼んでもいいよ」「どんな学びになってもいいから、子どもたちのためになればいいよ」というふうに言ってください、支えてくださっています。

また、昨年発足した東京大学の発達保育実践政策学センターの方々が縁の下役割を担ってください、心から感謝しています。ご参加くださいました皆様も含めまして、本日は誠にありがとうございました。



聖徳大学教授
小田 豊氏
Yutaka Oda